

句集

春時雨

宗田
小袖

序

能勢グループのよき世話役である宗田小袖さんも又句集を纏められることになった。他のメンバーとくらべて句数が揃わないという理由で躊躇しておられたのであるが、お嬢さんの強いあと押しもあって句集編纂を決心されたという。

気遣いが細やかで奥ゆかしい作者の性格は作風にも現れていて、確かな写生の中にも対象物への感情移入が巧みで俳諧味のある滑稽な作品がごく自然に生まれるのである。

近づくは人影ばかり蟻地獄

着膨れてハグの手背なにとどかさる

水澄みて真砂のをどる飛鳥川

客観写生術というのは主観を交えずあるがままをそのまま写しとることではあるが、完成されたそれからは自ずから作者の小主観が滲み出る。これは阿波野青畝師から学んだことであるがそのよき実例として次の二句を紹介しておきたい。

船頭の片方寡黙風薫る

鬼瓦忿怒してをる樹下涼し

同舟の客の感心はリップサービス豊かな船頭さんのほうに集中するのであるが作者は目立たない補助役の船頭さんの方に着目した。その対比を捉えたところがこの句の命となっている。鬼瓦の句は、樹下涼しの季語を配したことにより屋根のてっぺんにあるそれではなく造形物として庭に並べられた古瓦であることがわかる。鬼瓦を詠ん

だ句としてユニークである。

雪の道母娘の歩幅揃ひけり

愛するお嬢さんが俳句をされるようになり一緒に吟行にでかけて自然に親しまれる。これほど幸せで嬉しいことはない。この句集は作者である小袖さんの宝物であると同時に、お嬢さんのなおおさんにとっても目指すべきよき指針となることを願ってやまな。いつまでも仲良く共に切磋琢磨して信じる道を後進へと伝えてほしい。

平成三〇年五月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

秋霖の湖に棹さす蜺舟

峰寺の秘仏に見ゆ堂涼し

牧涼し羊に道をゆずりけり

里山の田毎の案山子個性あり

車椅子押して輪に入る盆踊り

舞殿の下に犇めく蟻地獄

青時雨刻印のなき力石

村道にたち並びたる紙雛

満員の子供列車や里の春

大冬木洞に在します地蔵尊

春落ち葉掬ふ庭師の竹箕かな

竹の花器へと一輪の紅椿

修復の城に檜の香や春しぐれ

春灯に揺らぐ秘仏の影法師

天空のほころびしごと春の雪

退院を謝し寄る宮に百千鳥

かな文字を散らす色紙に折り雛

門冠り松に余寒の雨しづく

春火鉢抱きて旅程練りにけり

梅探る城趾といへど土墨のみ

座禅終へ朝粥揃ふ堂涼し

句短冊に主を偲ぶ庵涼し

石鼎庵衣紋に掛かる単衣もの

定例句会入選句

吊橋に立ちて指呼せる芽吹き山

春寒し堂の羅漢は肩並べ

かちかちの轍も緩むとんどかな

燃え盛るとんどに神の宿るかど

竹爆ぜる音連鎖せるとんどかな

二頭身地蔵冬日にうづくまる

十字架に空の青さや冬の晴

冬の鯉池面のマリア像揺らぐ

きのご展実物見よと小雨中

峰寺の白砂の庭の風は秋

六甲の標高千の秋を聞く

一湾を眼下に山のバス涼し

新涼の牧のベンチに瞑想す

滝道の一步に涼し沢の音

滝茶屋の窓に古びし登山靴

清流の畔はことに濃紫陽花

水漬く枝の先は蜻蛉の休み処

一叢の著莪に歩をとむ散歩かな

園庭の花の遅速にめぐりけり

春雨のリズム生まるる鎖樋

朱の門の一步に園の梅香る

白梅のなだれ咲く丘匂ひけり

教会の庭のものもの芽存問す

欄四温水かげらふを見て飽かず

あふちの実万朶の小鈴散らすごと

そこここに小枝の撥ねる雪解かな

はなれ家へ標かたむく芒原

立ち入れぬ猿戸に透けて萩真白

観音の面に色なき風通ふ

風を待つ運河にヨットたゆたふて

佇つ吾の背な押す波止の風涼し

標たつ寺領ここより登山道

天蓋のなき母子像へ白日傘

水害碑隣る青田を一望に

地を覆ふ蔦瑞々し古墳山

雨晴れて小銀の珠を散らすバラ

青銅の拝殿高く緑立つ

春惜しむ神代の杜をたもとほり

落葉踏む池泉の庭をたもとほり

義士祭の名残の寺や子守柿

十字塚風化の面に冬日差

登りきし展望台は薄原

神の磐撫でて秋思をうべなひぬ

神の磐割れ目に宿す草紅葉

道をしへ大ジャンプして急かせけり

緑陰の古社に一礼園児どち

夏空を射抜かんと立つ天狗杉

網逃れては高舞へる揚羽蝶

昼憩ふ白つめ草の起伏野に

那智黒の敷石濡らす青葉雨

緑化園青葉若葉にたもとほり

さざなみのごとくに風の若楓

奥池へ辿る山路の風さやか

岨の道猪垣の扉の押せば開く

小
さ
き
錠
鎖
さ
れ
し
茶
室
青
葉
闇

ま
た
爆
ぜ
て
と
ん
ど
の
前
を
去
り
が
た
く

老
公
の
御
手
植
と
い
ふ
樹
下
涼
し

一番星かと思紛ひし初蛩

着継がれて今洋服の白かすり

大かやの寺を領りて風五月

灯を消しておやすみなさいお雛さま

探梅の城址に遠く海光る

雪の道母娘の歩幅揃ひけり

炭出しの頭巾をとれば湯気あがる

種火てふ太きらふそく寒の寺

湖遠くつぶてに見ゆる浮寝鳥

着膨れてハグの手背なにとどかさる

ローカル線子等の絵吊るし冬ぬくし

切り株に仲よく隣る冬帽子

石仏にはりつく蔦の薄紅葉

巡拝の岨の細道薄紅葉

鐘連打して始まりし盆写経

読み聞かせ教室窓に金魚玉

渇水のダム湖に安堵戻り梅雨

風涼し砂丘の渚ロードかな

青田風右近の里に広ごりぬ

楼門の朱の際立ちし若楓

ドクダミの大群落に薬師堂

水温む鯉はジャンプをくりかへし

鳩群るる池の汀に春惜しむ

楠若葉白亜の塔と並び立つ

豪邸の閉ざす門より梅ふふむ

公家雛の稚児まんまるの立姿

陶房のぬくしろくろの軽やかに

ライト坂花の蕾のまだ固く

社務所にもゆとりの見えし小正月

どんど焼き火だるまとなる熊手かな

公園の将棋族みな着膨れて

藩跡のしじまの小道茶の蕾む

避暑便りキテイの切手貼られあり

あきつ群る加速減速くりかへし

震災者記す巨石へ青葉傘

新樹光ダビデの星の彩窓に

春愁ふアンネの資料館を出て

石垣を割りて若木の桐の花

朱の御門くぐり華やぐ梅の園

法の山上へ下へと梅日和

炭窯に挿す幣真白年始め

冬晴れに商標の鶴羽ばたけり

朝明に訪ふ写経寺鐘涼し

稔り田の色に染まりし峡の里

深き谿なれども今朝は霧の湖

花 棟 一 樹 広 ご る 宿 場 跡

箒 手 に 笑 む 地 蔵 尊 夏 落 葉

草 青 む 近 江 平 野 の 長 き 畝

ひと息に雛の眉かく筆の先

古雛いと小さくとも気品満つ

産土神の礎へと消ゆる穴まどひ

禅林の葉擦れかそけく竹の春

大根焚世相話の尽きるなし

菜園のキュウリ曲がりしまま太る

去ぬ燕天文台に集合す

大夕立門跡かたく閉じしまま

夏雲かはた噴煙か桜島

河鹿鳴く昼なほ暗き峡の奥

夏草の宝庫や峡の道楽し

山藤のてつぺんよりの屑こぼる

石垣を映し代田の静まれり

船頭の片方寡黙風薫る

きらきらと日を撒きちらす春の雪

鸞替へて札の仄かなぬくみかな

大山の裾野を走る雪解水

吉兆のごと夕映ゆる春の海

竹筒の緑がよろし屠蘇祝ふ

吟行句会入選句

庭に置く結界石の寒さかな

漆喰の白墾つづく路地小春

辻に立つガイドの笑みに冬ぬくし

段畑に銀撒き散らす猫じやらし

朝日燦畦の下草露滂沱

斯く装ふ花野やここも寺領てふ

神さぶや産土の森秋灯す

水浸きつつ幹黒々と大夏木

対岸へ広がる池面緑立つ

園涼しラムズイヤーの葉にも触れ

漣を片寄せてゆく風涼し

蛇苺大樹の影に侍るごと

鎮魂のごとく御廟へ春の雨

花の宮結界のごと築地塀

廃校舎跡の裏山虫すだく

昼暗き黒書院でて目に青葉

白砂の道結界の芝青む

広々と武者隠してふ夏座敷

落椿 結界のごと 参道に

大王松 見上げる 頬へ 春の風

山寺の 小流れを 塞く 落椿

温むかと足踏み入れぬ汀まで

寒晴の中洲は鳥のハレムかな

枝移りする春禽の姦しく

庭園の飛び石づたひ石落小径

爽籟や池に散らばる鯉の影

姫らの井戸端会議小鳥来る

舞殿の四方に燃え立つ紅葉かな

石庭に濃き老松の秋日影

大和歌碑なぞる指先菘白し

水汲ん場一会の会釈爽やかに

白砂の銀と輝く小春かな

いと小さき大師像立つ泉かな

鬼瓦忿怒してをる樹下涼し

心経の合唱満つる堂涼し

濃淡の緑に染まる古刹かな

春愁か象後ずさりするばかり

推敲のベンチは花の文学館

力石凍つ恐竜の卵めき

萩の風へと扉を開く美術館

老翁の両手に杖や野路の秋

池畔に逆さ芙蓉の紅滲む

権現の磴の百段炎天へ

迷ひ道して斑猫と出会ひけり

神木の天蓋なせる五月闇

立て板を流るるごとし作り滝

ナレーション落語語りや蔵涼し

いとはんの衣装を展示蔵涼し

雨に克ちなほ崩れずに白牡丹

青銅の宝珠を囲む寺若葉

葉隠れに青梅育つしじまかな

東屋を借りて推敲春時雨

庭ここだ石仏浄土春時雨

扉を閉ざすホテルのチャペル春嵐

抽ん出て庭の要の楠若葉

落葉敷くへヤピンカーブ恐れけり

寒の水浴びせて祈る不動尊

母苞へ艶めくもみぢ拾ひけり

秋闌けし喫茶に一打古時計

丁目石半分沈む落葉嵩

みなし栗けどばしもして山路ゆく

爽やかに鈴振る巫女は幼な顔

趣をたがへ庭石梅雨に濡る

小祠の母屋に向きて坪涼し

蛇の目傘借りて愉しき梅雨の宿

山頂の吟旅の宿の明易し

道のべの仏に夏の日射しかな

近づくは人影ばかり蟻地獄

千手の枝かざすは神の大夏木

岬に佇ち春光の海パノラマに

若布屑競り場を流す水に消ゆ

春の水奏でて注ぐビオトープ

潮の香に誘はれゆく春岬

鴨引いて風の細波あるばかり

大池に一尾の鴨も見あたらず

箏子鳴く径句碑歌碑をつづりけり

春泥の庭を闊歩すちやぼをかし

秋うらら空港島の浮かぶ海

爽やかに風車の回る丘の上

秋桜グリム童話の庭に揺れ

とりどりの薬草園に秋惜しむ

人力車幌に影さす若楓

そぞろ歩に梅東風匂ふ宮の道

撫で牛のまなざしの先梅盛る

三門の四方に錦す寺紅葉

草庵は二畳一と間や秋日濃し

女郎花長けてさゆらぐ女塚

池の面桜もみぢの穢となさず

塔仰ぐ女人高野の青嶺濃し

梅雨の川岩に砕けて高鳴れり

五月雨の苔むす石の苑めぐり

杣道具吊す山祇青葉風

家苞に吉野箸買ふ避暑の旅

水神のほこらは深き梅雨の奥

深吉野の瀑布真白にたぎちをり

草螢きらり水辺の遠近に

深山よりつと現れし梅雨の蝶

梅雨出水岩に砕けて響きけり

廃校の梅雨黴久し長廊下

すつぽりと抜ける青空初蝶来

楼門の威風堂々春日和

落葉道賽の河原に行きどまり

春陰の羅漢のひとつ合掌す

極彩の高き塔より雪解水

雪だるま汚れやんちやの児のごとし

信号も聖夜の星のひとつかな

街師走路地あちこちに荷を下ろし

炉を囲み大家族めく句会かな

薄もみぢ古戦跡碑の傘なせる

山門を額ぶちとして稲田見ゆ

二面石彫のくずれに秋思憑く

糸とんぼ川面を掠め掠め飛ぶ

沢音の強弱もまた秋の声

稔り田に天の香具山横たはる

秋の鐘一打首塚寧かれと

石舞台秋つ光を集めをり

水澄みて真砂のをどる飛鳥川

あとがき

娘の後押しでかけがえのない句集が出来上がりほんとうに嬉しいです。

十八歳で郷里の香川を離れ、東京、大阪と移り住んだ私は、結婚して今の能勢で生活するようになりました。故郷で俳句を少し嗜む母の姿を見ていたからだと思いますが、趣味として何の迷いもなく地元の公民館俳句の会に入会しました。

その後、インターネットを通してウェブサイト『ゴスペル俳句』とのご縁ができ地域の仲間とともに吟行での学びをはじめました。季語の何たるかもおぼつかない頃でしたが吉野一泊吟旅での鍛錬会がとても印象深く楽しい思い出です。

塔仰ぐ女人高野の青嶺濃し 小袖

室生寺を訪ねたときごく自然にこの句が授かりました。一番好きな作品です。そして何よりも嬉しいことは、母、私、娘の直子へと俳句が受け継がれてきている事です。身にあまる序文を頂き、句集についてご指導を賜ったやまだみのるさん、手順や作業について何かと助言やお手伝いをいただきました句友の岩原うつきさんのご厚意に心よりお礼を申しあげます。

これからも娘ともども切磋琢磨してよき俳句ライフを歩んで参りたいと思います。

平成三〇年五月吉日

宗田 小袖

『春時雨』 宗田小袖句集

平成三〇年七月三〇日 印刷

平成三〇年七月三〇日 発行